

西播第2グループ IM

ロータリーの夢と哲学～21世紀のロータリー～

国際ロータリー第2680地区パストガバナー 久野 薫 (神戸東)

西播第2グループの皆さんこんにちは。本日は当グループのIMにお招きいただきまして大変光栄に思っております。本日の講演は、今年度が始まる前から既に、私の敬愛する久保泰造ガバナー補佐から直接ご依頼を受けておりました。大役を無事果たせるか一抹の不安はありますが、私のロータリーライフの集大成を兼ねてお話しさせていただきたいと思っております。

序にかえて ～変質するロータリー～

112年という歳月を重ねてきたロータリーは、今、変質しようとしております。否、すでに変質したというべきかもしれません。変質するということは本質を失って、違う組織に変わってしまうということでございます。私が考えるロータリーの本質というのは“職業奉仕を中心に据えた、奉仕の理念の実践”ということでございます。これが失われてきていると思っております。一体いつの頃からか、と尋ねられても特定できませんが、1980～1990年頃から徐々に進行し、今日顕在化したと言うべきでしょうか。私の神戸東RC入会が1988年ですから、私は本当の意味でのロータリーの雰囲気は知らないのだと思います。“凛とした雰囲気”が、例会から消え、楽しい楽しいだけの例会になってしまいました。今のロータリークラブは、ロータリーを核としたものではなく、ゴルフあるいはその他の同好会を核とした楽しみクラブになってしまった感があります。

RI理事会に設けられているいくつかの委員会の中の職業奉仕委員会が1947年廃止され40年後の1987年に復活しましたが、1989年「ロータリアンの職業宣言」を制定しただけで、すぐにまた消滅しました。また、2000年というのは、“奉仕の理念”を育むための

制度の中核（限定会員制度、例会出席の重視、職業奉仕の アイデアの交換）

に、相次ぐ規制緩和が加えられ始めた時期であります。奉仕哲学の追求より奉仕活動の実践が重視され、例会はもはや「人生の道場」ではなくなりました。例会では、会員におもねて、ほとんど教育的な話は影をひそめてしまっております。そのためか、ロータリーと真剣に向き合おうとする会員は減少し、ロータリーを趣味とする、ロータリー三昧の虚飾のロータリアンが、我が物顔にのし歩く現状であります。良質な会員は、黙して語らずか、嫌気して辞めていく、悪循環が起こり始めているのです。

量子論において、量子の性質を説明するのに引き合いに出される表現に

“誰も見ていない月は存在しない
月は人が見た時初めて存在する”

というがあります。これは量子というマイクロの世界だけではなく、われわれ日常のマクロの世界にも通じます。“心そこにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞こえず”であります。そこで、ロータリーと正面から向き合い、ロータリーについて語り、考えてみようというのが本日のIMの本意なのです。

今年度、当グループのIMテーマは「“ロータリー”原点への回帰」であります。馬車を主要交通手段とした時代から、宇宙旅行も夢ではない今日まで、1世紀以上を経過しています。時計の針を逆戻しした原点では勿論ありません。原点としてロータリーの神髓を何に求めるかを問うているのです。そこで、

“愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ”

と申します。歴史と言っても、単に出来事の羅列ではなく、歴史をつき動かしている背景に思いをいたし、現状を分析して、過去と照合し、未来を展望してみたいと思います。そんなわけで、まず現状分析から初めてみたいと思います。

1. ロータリー第4の危機？ ～会員数の減少と変質～

2011～12年度RI会長、カルヤン・バネルジー氏は「ロータリーは今重大な危機に面しているロータリアンがどんどん減っている。彼らは一体何に不満でロータリーを去っていくのか？」

と疑問を投げかけました。ロータリーは、今や、かつてのロータリーではありません。今では、アメリカの指導者層のロータリアンは、“奉仕の理念”や、その誕生の歴史的流れなどに対する関心は極めて低く、シェルドンの名前さえ知らない外国のロータリアンは珍しくないとされます。したがってロータリーが“奉仕の理念”を育む、人材育成のための団体だと定義づける人はほとんどいなくなって、ボランティアをするための団体の一つと考える人が大多数を占めるようになってきているのです。世界一のNPO法人を、志向しているのです。

つまりは、過去に学んでいないということであり、過去がそうであったということ自体を知らないのではありませんか。眼前にあるロータリーは、かつてのロータリーとは分断された、別のロータリーであり、ごく一部の人のみが、かつてのロータリーの影をたたくて在籍しているといった構図が思い浮かぶのです。

シェルドンの職業奉仕哲学は過去の遺物にすぎず、「欲望という名の電車」で突っ走る職業人を、もはや、人の良心や哲学のみで規制することは出来なくなっているのです。そこにあるのは、モラル無き資本主義であり、論理の国アメリカにおける、ロータリーの行き詰まりであります。

この度の第4の危機の一因は、会員減少がもたらす危機であります。ロータリーの存亡をかけた深刻な危機であります。2002年から、世界のロータリアン数は120万前後で推移し増加がみられません。先進国での会員減少、後進国での会員増強から来る、ロータリーの地殻変動であります。この傾向は世界の人口動態から見て2050年以降、より深刻なものになります。アフリカにおける人口爆発、貧困の悪循環、民族紛争は最後まで取り残された世界の課題となります。そのためか、2018～19年度RI会長はウガンダ出身のサミュエル・オオリー氏が指名されていましたが急逝されたので、急遽パハマ国のバリー・ラシン氏に変更されました。彼はどんなRI会長テーマを掲げ、ロータリーに何を求めるのでしょうか。

話は少し横道にそれますが、会員増強に妙手はあるのか？について考えてみましょう。会員増強は①勧誘(recruit)②維持(retention)③再活性(revitalize)④拡大(extention)のE+3Rしか方法はありません。2012年RIは、毎年3%の会員増強計画を立て、2015年までに、世界の会員数130万人達成を目指しました。そしてその妙手として採ったのが①若年層、女性層、配偶者、家族、ロータリーファミリーを対象として勧誘②年会費、例会開催時間の見直し③Eクラブの拡大④いわゆるSAKUJI作戦でありました。結果、成功したのかどうかは、事実が証明しております。妙手というのは存在しないのです。人口動態のように抜き差しならない原因はありますが、致命的なことはロータリーに魅力、メリットを感じなくなっているということではありませんか。

近年RIはゾーン単位で、会員増強の妙手を求めて「戦略計画推進セミナー」なるものを開催しています。召集される各地区の役員は、ガバナー、エレクト、ノミニーはじめ、戦略委員会、会員増強委員会、広報委員会各委員長に加えて、誰あろう財団委員会委員長であります。財団事業の成果を広報することで、会員増強を図ろうということでもあります。一体妙手となりうるのでしょうか、疑問なしとはしないのです。かつて昔は会員増強委員会と職業奉仕委員会合同のセミナーが施行されていたことと比べると、RIの意図するところには彼我の違いがあります。

先進国での会員減少の元凶は、アメリカと日本にあります。アメリカでは1994年の421,823人をピークに、現在、その約20%が減少、日本では1997年の131,731人をピークに、現在、その約30%が減少しております。

これまでの世界の会員増加曲線は、S字状を描いています。これは会員数が飽和状態にあることを意味します。会員の自己増殖の限界であります。今後一定のLag timeを置いて、再びS字状を描いて、増加するか、減少するかで、ロータリーの命運が決まるのです。ロータリー大国を自認する日米両国のロータリー運動に陰りが出てきていることは大きな問題で、今日の第4の危機をより深刻なものにしているのです。

会員数減少の原因は、勿論、日米で必ずしも同じではありません。米国では、かつてはアングロサクソン民族によって占められていた白人中心の共和国は、今や黒人、ヒスパニックの大量移民によって、人口4億人の民族モザイクの共和国に変わって行こうとしています。ロータリーに期待するものは自ずから変わってきているのではないのでしょうか。かつては五大湖周辺に広がった、大工業地帯は、今やラストベルトとよばれ、poor whiteを象徴しています。これらは米国における会員数減少と無縁ではなさそうです。

世界一のNPO法人を目指すロータリーにとっては、会員数の減少は、致命的なものです。TRFを通じた成果によって、世界にアピールしようとするロータリーにとっては、財政的基盤を揺るがす大問題であります。

わが国の事情は少し違います。決してTRF云々の危機感ではありません。勿論、少子高齢社会の人口動態はわが国の会員数減少の根源的原因ではありますが、1990年以降、RIが奉仕哲学の追求より、奉仕活動の実践を重視するようになった、RIの方針転換に対する危機感であります。人づくり組織からNPO法人化したRIへの危機感なのです。

わが国の会員数の動向を申し上げるならば、2007年、会員数は10万人を切ってインドに次ぐ第3位の会員数になりました。2014年に9万人を切り、現在89,000人前後で推移しています。このままですと、人口動態も考え合わせると、2050年には6万人台になってしまいます。

会員増強、拡大は喫緊の課題となり、為に2010年以後、やみくもに増強を図ったつけが今回ってきているように思われます。ロータリーの何たるかを知らずに入会すると、入会后とのギャップで、ロータリー離れの原因にも、クラブの弱体化にもつながります。

このことは既に、

1924～25年度RI会長エベレット・ヒル氏が「今までロータリーという団体の真の目的を知らずに入会する人が多くいました。ロータリーの知識に乏しい人を会員に迎えたクラブは、結果的に弱くなってしまいます」と語られました。「会員増強に関しては、会員の勧誘と維持そのものを目的とするのではなく、ロータリーとは一体どんな団体かを理解することから始めなければならない」

とも言われ続けられてきているのです。それらの警告は無視されてしまったのです。

そのためか今の日本のロータリアンは、奉仕哲学の追求に熱心でもなく、かと言って奉仕活動の実践に熱心なのではなく、財団には適当に寄付して、奉仕の免罪符とし、RIの動向には無関心であります。ことロータリーに関しては無関心、無感動、無責任、無気力であります。そしてクラブ自治権と称して何もしない自治権を振り回し、ますますRIから遠ざかってきております。RIから提示される、DLP、CLPに正面から向き合う姿勢は希薄であります。これで日本のロータリーはRIから益々乖離して行っております。

1983～84年度RI会長、ウィリアム・スケルトン氏は

「ロータリアンにとっての最悪の罪は、憎しみでも何でもない、同じロータリアンのすることに無関心であることである」(1983～84年度RI会長、ウィリアム・スケルトン)

と言っています。その最悪の罪を我々は今、犯し始めているのです。現在の日本人ロータリアンの特徴は

- ① 自己を主張せず、クラブ単位で物事を考え、行動する
- ② クラブ間、グループ間、地区間のネットワークづくりに消極的、ひいては世界のロータリアンの意識はない。クラブ会員数の減少は、合併より、脱会につながっていく
- ③ 原理主義、教条主義のため、奉仕哲学の解明には興味を示すが、チャリティ、ボランティア活動は身につけていない
- ④ 退会者への配慮に欠け、脱会クラブへの追跡調査もしない

かくして西洋では抵抗なく受け入れられているように見える、今日のボランティア活動団体、人道的奉仕団体も、日本人にとっては居心地の悪いロータリーになってしまっているのです。ロータリーに在籍

する唯一ともいふべき理由は、誤った選民意識、親睦と商売上の相互扶助だけにあります。それも多くの場合、双利共生ではなく、片利共生であります。ロータリーにおける禁じ手「事業または専門職上の関係において、普通に得られない便宜ないし特典を同輩ロータリアンに求めない」は、後述する2014～15年度RI会長ラビンドラン氏の提案を俟つまでもなく、既に踏みにじられているのです。

ロータリーは、この度の第4の危機を迎えるまでも、第1、第2、第3の危機を経験してきました。すべての始まりは、シカゴRCの誕生であります。

2. すべてのことの始まり ～シカゴRCは何故生まれたのか?～

「西部の都市シカゴの、そのよこしまで落ち着きのなさが何故か奇妙な魅力となってとりついた」ポール・ハリスという名の一人の弁護士が、「友情とビジネスを結び付け、それによって事業も栄え、友情も深めることができるのではないか」というアイデアを基に、わずか4名の優良な職業人と語り合って1905年にシカゴRCは誕生しました。当初は、商売上のうまみを求めて会員が集まってきたのです。しかし、いかに良質とはいえ会員同士の不正な取引もあって

「商取引にあって、ロータリアンという言葉は純金と同意義でなければならない」

という職業奉仕の萌芽を生むことになったのです。これは当時、会員の多くを占めていたイギリスのプロテスタントの一派、ピューリタンの「プロテスタントの倫理」が、資本主義の精神、やがてはロータリーの職業奉仕と結びついていくことになるのです。

ロータリーの「職業奉仕哲学」は、1910年(シカゴ大会)のA.F.シェルドンのモットー、1911年(ポートランド大会)のB.F.コリンズのモットーの発表によって明文化されました。それは

“最もよく奉仕する者、最も多く報われる”(シェルドンのモットー)、“超我の奉仕”(コリンズのモットー)

であります。実は、この2つのモットーは、同根のもので、互いにハイフオンで結ばれ、

“超我の奉仕—最も奉仕する者、最も多く報われる”

と表現されるべきものなのです。そしてこれは表現を変えた黄金律であります。黄金律とは「己の欲するところ、人に施せ」であります。

シェルドンのモットーは、1902年から彼が経営する販売学のシェルドンスクールにおいて、因果律によって導き出された、ビジネスの科学でありました。これが日本人の心酔するところになりました。なぜならば、古来わが国で伝えられてきた、石田梅岩の石門心学、“奪うに益なし、与うるに益あり”の二宮尊徳の推譲の理論、近江商人の三方よしの考え方と、相通じるものとして日本人は考えたからです。

時を経て戦後の1955年、ロータリーを最も知る男、1910年から1942年まで32年間RI事務総長を務めたテュスリーR・ペリーが、ロータリー創立50周年を回顧して〈BIRTH of AN IDEA〉と題して

講演しております。(講演内容は1980年5月号、2001年10月号の『ロータリーの友』誌上に掲載されております)

彼の講演内容で私が注目するところは、次の2点

- ① 「“奉仕の理想”は全ての主だった宗教にみられる言葉を変えた黄金律であり、その重要性を全ての人達に解ってもらうのがロータリーの目的なのです。これが崇高なロータリー運動の目的なのです。目的はこのように簡明なのです」
- ② 「20世紀半ばはなんと不幸で恐ろしい世界でありましょうか。“奉仕の理想”を受け入れ実践しているロータリアンがそれを放棄したのではなくそれに耳を貸そうとする人々があまりにも、少ないからであります」

であります。アメリカでは1955年にして早くも、資本主義の資本の原理が生み出す、巨大資本の前に、職業奉仕が重要視されなくなっていく今後を予感させているのです。

3. “奉仕の理念”実践の1丁目1番地 ～職業奉仕観の変遷～

「ロータリーの目的」(従来の“綱領”)の第2項に、“ロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること”と規定されています。それに従って、“職業奉仕”の定義は、職業を通じた社会への奉仕とされます。しかるに、戦後、職業を通じた社会への奉仕の解釈に東西の温度差があります。われわれの考える、“職業を通じた社会への奉仕”とは、職業を営む行為の中に、“奉仕の理念”を実践することであり、職業を離れた所に職業奉仕はないと考えるのですが、

RIはCode Of Conductに見るように、単に職業上のスキルを利用した社会奉仕と考えるのです。

そこには、哲学は不要であります。だから「奉仕の理念の習得には、就労経験の有無とは関係がない」という認識がRIで蔓延しているのです。

現在のRI理事の中にもそう言うてはばからない理事も少なくないのです。

「On Board」(理事会にて)と題して、the rotarian、2016年4月号(ロータリーの友、2016年4月号)に

「自分の義理の姉は、学歴があって、家庭を持ち、地域社会で積極的に活動しているが、就労が条件となると、ロータリーには入会できない」とカナダ出身のRI理事ジェニファー・ジョーンズが語ったところ、他の2名の女性の理事も「そうした規定は、ロータリーにおける永きにわたる性差別問題を助長するだけ」と同意を示した。

という意味の記事が掲載されております。皆さんが何気なく読み過ごされたこの記事に、私は強い違和感を覚えるのです。私にとって驚きであります。こんなわけだから2013年規定審議会は専業主婦の会員資格を認定することになったのです。これは、職業を離れて職業奉仕は存在しないと、日本の職業奉仕観の

「ガラパゴス化」

という人もあります。この言葉は、2006～7年頃から、わが国で使われ始めた、ビジネス用語であります。国際的な標準から、かけ離れた状態を意味します。しかしむしろ日本の職業奉仕観こそが標準であるべきと我々は考えているのです。職業奉仕哲学の軽視は、今日の第4の危機の一因をなしているのです。

因みに5項目からなる「ロータリアンの行動規範」の5番目の条項

「事業または専門職上の関係において、普通には得られない便宜、または特典を同輩ロータリーに求めない」

を、2014年4月のRI理事会において、当時まだRI会長エレクトであったスリランカ出身のラビンドラン氏の提唱で、会員増強の一助として、“ロータリアンに特典を”の意図からでしょうか、削除してしまったのです。さらに、彼はRI会長として、2015年7月から「Rotary Global Rewards」というロータリアン特典策を始めたのです。これらは、見識あるロータリアンの顰蹙を買う結果となっているのです。

RIは会長以下、19名の理事によって方向付けが行われています。さらに、2016年規定審議会決議で「RI会長は、全世界のロータリアンにとって前向きかつ意欲を引き出すリーダーとなる」(RI細則第6条)と位置付けされております。然し、以上例を挙げて示しました通り、RI理事会と雖も、私達日本のロータリアンの代弁者では決してないのです。RIと我々の思惑が乖離して行くことは、“むべなるかな”であります。

4. RCの危機の回避 ～RIは何故生まれたのか?～

ロータリーは今日まで、幾度となく危機を迎え、その都度、克服してきた歴史を持ちます。

第1の危機;1906～1910年の「親睦か奉仕か」の論争

奉仕と言っても職業奉仕は、受益者が職業人自らであるため、さしたる抵抗もなく受け入れられましたが、親睦と相互扶助、心のオアシスを大命題とするシカゴRCの中に、社会奉仕の概念を導入することは、草創期には大きな抵抗があったのです。

1906年ドナルド・カーターが、シカゴRCに社会奉仕の必要性を提唱し、ポール・ハリスもこれに賛同したことが、クラブ内に思わぬ大波紋を呼び、「親睦か、奉仕か」の争いで、クラブ崩壊の危機を迎えることになったのです。シカゴ市役所や、図書館に公衆トイレを寄贈するという、まことにささやかな社会奉仕プログラムが、シカゴRCの存亡をかけた、対立の火種になろうとは、彼らの親睦、友愛への思いの強さを思い知らされるのです。

これこそがロータリー第1の危機であったのです。この危機を解決したのは、クラブ連合体という、別組織を作って、クラブに親睦のエネルギーを温存させたことであります。

今後再び、RCの親睦のエネルギーを削いで、危機を迎えることがないように、全米ロータリークラブ

連合会(1910)、国際ロータリークラブ連合会(1912)を経て、1922年、RIというロータリークラブの連合体を作る必要があったのです。ここでRCはRIに

① 奉仕哲学の解明 ②ロータリーの拡大 ③情報媒介

の3つの機能を委託して、RIという別組織を作ったのです。その代わり、クラブは、RIの定款、細則、クラブ定款を遵守するという契約を結んだ訳であります。クラブ自治権はRI定款、細則、クラブ定款に違反しない範囲で認められます。これがRCに許された自治権であり、自由度の範囲であります。これまでクラブの自治権は

クラブ定款第13条、第1節、管理主体

に唯一、明文化されておりましたが、この度の2016年規定審議会によって、会員資格、例会開催、出席義務、クラブ年会費に関する、各クラブ細則条項上にクラブ毎の自治権内容が明文化されることとなります。ここに各クラブの個性が表出されることとなります。

この危機の後、1910年、ポール・ハリスは「Rational Rotarianism」の論文の中で「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」と大悟し、寛容の重要性を説いております。この意味で1910年が「ロータリーの思想の原点」と考えることが出来ます。“寛容”がロータリーの思想の原点なのです。

ここで私たちが注目すべきは、寛容は東洋思想の属性であることです。以後ロータリーは、非寛容 Logical な西洋思想の頭に、寛容 Ecological な東洋思想をいただく、ねじれた状況で歴史を刻むことになるのです。以後のロータリーの歴史は、物質文明、西洋思想と精神文明、東洋思想のせめぎ合いの歴史であったように私は思います。

第2の危機;1919~1923年の「国際身体障害児協会」支援を巡る「親睦か社会奉仕か」、「職業奉仕か社会奉仕か」の論争

第2の危機も社会奉仕導入を巡るものでした。エリリアRCのエドガーD.アレンが1919年「国際身体障害児協会」(後のイースターシールズ)を設立して、ロータリーに支援を求めたことに始まります。「職業奉仕か社会奉仕か」のロータリーを二分する大論争は、1923年のセントルイス宣言で解決を見るのです。世にいう「決議23-34号」であります。これによって個人奉仕、単年度奉仕を原則としながらも、奉仕活動の訓練の場として例外的に団体、継年奉仕も認めたのです。

この身体障害児救済事業は1929年ダラス世界大会で、再度、支援が決議され、同大会でシェルドンの標語の、否決されたとはいえ、廃止案が提出されたこと、1930年にはポール・ハリスが同協会に、未だ低迷するTRFから500ドルを寄付して支持を表明した事で仲たがいをしたのでしょうか、シェルドンは1930年にRCを去ることになるのです。シェルドン退会は一時、シカゴRCに会員数減少をもたらしたと伝えられます。

第3の危機;1929~1950年の世界大恐慌から第2次世界大戦までの、外的要因による会員減少ところが、この時期ロータリー自体の在り方に？が付けられました。イギリスの評論家、ギルバートK・チェスタートンは、19世紀後半のビクトリア時代後期の、物質主義と自己満足を著書『This Victorian

Age』で批判し、20世紀初頭のこれに類した思潮にも、『This Rotarian Age』と題して、痛烈に批判しました。彼はロータリーの世界的発展に対して人間知性の墮落と批判しました。当時のシカゴRC会長ジョージ・ハーガーは徹底的にシカゴRCを分析して1934年批判的な『Rotary?』を出版、その影響か、ポー・ハリスは1934年の自著『This Rotarian Age』(ロータリー理想と友愛、米山梅吉訳)の発刊を遅らせたと伝えられます。1905年創立され、4半世紀のうちに基礎固めが出来上がったかに見えたロータリーではありましたが、早くも限定会員制度をはじめ、制度疲労のきしみを覆い隠すことが出来なっていくのです。

第2次世界大戦が終結しても、世界平和は訪れませんでした。資本主義と社会主義の、米ソ冷戦時代の到来であります。1960年代は、キューバ危機、ベトナム戦争などの局地戦争は絶えませんでしたし、今でも中東、アフリカでは、宗教間、民族間対立で紛争がやむことはありません。世界平和を究極の目的にして、112年の歴史を歩んできたロータリーの未だ道遠く、果しえぬ夢であります。1969年アポロ11号が月面上陸を達成し、月からの地球を見て、地上での戦争のむなしさを実感したと伝えられます。

1960年代は、ロータリーでは、インターアクト、ローターアクト、RYLA、青少年交換事業等次世代を担う青少年の育成が盛んになっております。若者育成を通じた、世界平和への希求であります。1965年には若者の異文化交流事業GSEも開始されました。アインシュタインの言葉を俟つまでもなく「世界平和は力に依って達成、維持は出来ない、お互いを知り合うことが、遠回りに見えて近道なのです」。

5. ロータリーの理念、目的、目標

RIは法人組織であります。すべからず組織には、理念、目的、目標があるように、RIにもあります。あらためてロータリーの理念、目的、目標を考えますと、その理念は「奉仕の理念」(Ideal of Service)であり、その意味するところは、「綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針」「決議23-34号」第1項に

「ロータリーは基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕-「超我の奉仕」-の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」という実践原理に基づくものである。

と要約されています。

“他者のことを思いやり、他者のために尽くす”(Thoughtfulness and Helpfulness)

と言い換えることが出来ます。究極の利他であり、言葉を変えた黄金律であります。ロータリーの“目的”の意味するところは、いわゆる“ロータリーの目的”の前文に記載されています。

主文は

「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を推奨し、これを育むことにある。具体

的には、次の各項を奨励することにある」と続きます。次の4項を一体化して表現すれば、身の回り万般に亘って、奨励し、育むこと

となるのです。

前文を“奉仕の理念を意義ある事業の基礎とすべし”と翻訳すれば、職業奉仕こそがロータリーの目的と解釈されるのです。しかし、西洋では、職業奉仕は他の奉仕部門と同列のもので、奉仕の理念を適用すべき、一部門にすぎないと考えられています。われわれ日本のロータリアンは、5大奉仕部門の中でも、とりわけ職業奉仕において実践しようとする組織がロータリーと考えているのです。職業奉仕に対する抜きたい東西の温度差であります。

6. RIの実戦部隊 ～TRFは何故生まれたのか？～

TRFは何故生まれてきたのでしょうか。RIは奉仕哲学の解明のために、その哲学と実践原理を提唱することはあっても、実践に移す組織ではありません。したがってRIの方針に従ってこれを実現するための事業を行う組織が必要であります。

その組織として生まれたのがTRFであります。時に1917年のことあります。RIが親睦か奉仕かで激しく揺れ動いている時期、第1次世界大戦の最中、いくら平和への希求とはいえ、時期尚早であったのです。これはロータリー大好き人間、何事においても、基金を以って緊急時に備えるという、TRF創設者アーチ・クランプの人となり、ポリシーのなせる業だったのです。案の定、30年間寄付金が思うように集まらず、開店休業、1939年には解散の危機に見舞われたのです。唯一の支援者はポール・ハリスだったと言われます。その蒔いたどんぐりの実が、今日のりっぱな樫の木に育つことになったのは、ロータリーマジックの一つと言えるかもしれません。

ところが今ではTRFなしにRIは語れなくなりました。ましてや、2017年はTRF創設100周年ですから、TRF一色に染まっているのです。

TRFには設立当初から、明らかにされるべき、三つの課題がありました。

① RIとTRFの関係 ② TRFの使命の限界 ③ 寄付金推進策

- ① TRFは1917年、「国際理解、親善のために、世界で良いことをするための基金をつくらう」という、当時の国際ロータリークラブ連合会会長、アーチ・C・クランプの呼びかけで創設されました。しかし、寄付金を集めたり、それを管理、運用する任務は、本来RIに委託された仕事ではありませんから、必然的にRIから独立することになります。1928年RIから独立して、正式名TRF(国際ロータリーのロータリー財団)となりました。1931年教育、人道的事業に特化した信託組織となりました。そして1983年、創設66年も経って、非営利の財団法人となったのです。何故こんなに法人化が遅れたのでしょうか。因みに1952年創設された米山基金はわずか15年後の1967年に法人化されており、それだけTRFの活動は長く不活発であったということでしょうか。

TRFのモットーは「世界で良いことをしよう」(Doing good in the world)、使命は「ロータリアン

が健康状態を改善し、教育への支援を高め、貧困からの救済を通じて、世界理解、親善、平和を推進する」(2007年)であります。

TRFの法人化にともなって、「国際ロータリーのロータリー財団法人設立定款」と「国際ロータリーのロータリー財団細則」が制定され、RIとTRFの関係は明確化されました。

それによりますと、TRFはRIの方針に基づいて、教育的、人道的プログラムを実践する慈善事業組織と定義づけることが出来ます。あくまでRIのTRFであり、RIの下部組織であります。しかしRIは社団法人、TRFは財団法人で、組織の上では、別組織、人事、財務の上では必ずずぶの関係にあるのです。

- ② TRF使命の限界の有無に関しては、RIの理念、目的の実現のための目標の一つとしてのTRFです。おのずからRIの理念、目的、つまりは、職業奉仕を中心に据えた“奉仕の理念”を忘れてはいけません。“世界に良いこと”は沢山あります。だからと言って、良いことは何でもやるということは「奉仕の百貨店」になってしまっていて、RIの分度を逸脱しているのです。しかし、現実には、TRFの目的が自己目的化して、際限なき国際的人道的奉仕活動が広がっているのです。「仁」に過ぎれば組織は弱くなるのです、「奉仕の理念」に過ぎれば、ロータリーは弱体化するのです。さらに私見を述べればTRF事業は本来、教育事業のみに信託すべきであって、WCS事業はRIの分度を越えた事業ではなかったのかという思いが私にはあるのです。

- ③ 寄付金集めに関しては、1945年TRFが免税団体に指定されたことは何にもまして追い風となっています。それに加えて、TRFは人間の射幸心に訴えかけた、数多くの認証制度が功を奏して、年間2億5000万ドルの寄付を集めるに至っております。1957年ポール・ハリスフェロー制度の導入に始まり、1999年遺贈友の会、2000年前後に大口寄付(レベル1~4、10万ドル)、アーチクランプササエティー(レベル6まで約10億円)、ポール・ハリスササエティーがあずかって力があつたと思います。また、論功行賞は世の常です。認証人事も当然のこのようにまかり通っているのです。

唯、TRFの認証人事を、RIの人事に持ち込んではいけません。これがロータリーの矜持というものなのです。金が支配するロータリーになってしまえば、ロータリーは空洞化するのです。心の匂いならず、金の匂いしかなくなってしまうのです。

ポール・ハリスの死後、1947年「ポール・ハリス記念基金」が設立され、この基金をもとに、「国際親善奨学金制度」が発足し、財団事業は教育事業中心に本格化しました。しかし、この教育事業重視の財団活動の流れは、1962年RI理事会が「世界社会奉仕」(WCS)を導入したことで一変したのです。WCSという国際的人道的奉仕活動が教育事業を凌駕するようになったのです。先に述べた通り、TRF本来の事業、教育事業を、分度を越えたWCS事業に踏み出しことになるわけです。

WCSはRI理事会の「一部地域の貧困は全体の豊かさを危うくすると認識し、あらゆる国の生活水準を高めようとする活動を支援すべきである」という考えに基づくものであります。

1968~69年度RI理事会の定義によりますと

「WCSとは、低開発国のクラブあるいは地区が、自国の生活水準向上のための、人道的奉仕活動を立案実施するにあたって、先進国の地区あるいはクラブが援助の手を差し伸べ、もって生活水準の向上、および、両国の相互理解親善を推進する」

ということであり、世界における社会奉仕活動で、地域における社会奉仕活動の延長にすぎないという主張であります。この考え方の底流にある思想は、グローバリズムに基づく世界観であります。しかしアメリカンスタンダードにつながって、アメリカ一極集中に結びついていると思われます。

RIは創立後100年を経過しても、認知度低迷に直面しています。会員数も減少し始めました。RIはこれまでの方針転換を迫られたのです。

2010年RIは今後の戦略計画として、3つの優先事項を提示しました。更には、2014年10月にもRI理事会決定で、4つ目の優先事項が追加されました。すべての道を、TRF支援に通したのです。4つの優先事項とは、

1. クラブのサポートと強化
2. 人道的奉仕の重点化と増加
3. 公共イメージと認知度の向上
4. 財政的継続性と運用有効性の向上

であります。一方、TRFは2013年からは「新しい補助金制度」を提案し、補助金の運用方法に大幅な改正が加えられ、かつてのWCSは、今では人道的プログラムと呼ばれ、1991～92年度から導入されているシェアシステムによる資金援助を受けて、世界の6つの重点分野に特化した大規模事業を展開する方針を採ったのです。6つの重点分野とは

世界の6つの重点分野

平和と紛争予防／紛争解決
疾病予防と治療
水と衛生
母子の健康
基本的教育と識字率向上
経済と地域社会の発展

2016～17年度、RI会長ジョン・ジャーム氏は、RIと財団が融合した戦略計画で成果を上げ、徹底した成果主義、持続性のある成果、計測可能な成果でRIのアイデンティティーを一挙に確立するという、起死回生、9回裏、逆転満塁ホームランを狙ったのです。これは論理的、数理的、合理的西洋思想の産物であります。

（“Whatever Rotary may mean to us, to the world, it is known by results it achieves.”）

私が思うに、たとえ6つの重点分野に特化した大規模人道的奉仕活動を展開しても、従来とさして効果は変わらないと思います。もしRIが、TRFが本当に起死回生のホームランを狙うならば、今や撲滅までfinal inchを迎えた、ポリオプラスプログラムの成功に学ぶ必要があります。6つと言わず、一点豪華主義、たった1つのプログラムに、集中すべきだと思います。

それはおそらく

ポスト-ポリオプラスプログラムは世界平和への支援

だと思います。これは既に始まっています。1997年6つの平和センター設置、2002年世界平和フェロースHIP制度発足であります。この制度のために、恒久基金(1980年世界理解平和のための基金から1994年恒久基金に改称)へのメジャードナー寄付を推奨しているのです。目標は2025年までに恒久基金20億2500万ドルです。しかし世界平和達成のむずかしさは、勿論ポリオプラスの比ではありません。

RIの究極的目的は、世界平和であることを忘れてはなりません。職業奉仕で培われたロータリアンの高い精神性のすべては世界平和にこそ向けられるべきです。それは世界のすべての人が等しく希求しない限り実現しないのです。

2016年規定審議会で、RI提案として「RIの戦略計画委員会の委員を8名とし、うち4名はRI理事会により、4名は財団管理委員会により任命された、RIと財団の合同委員会とする」というRI理事会提案が採択されたのです。ここにRIとTRFが合同して、今後の長期計画を推進する方針をとったこととなります。

一連のこのような動きの意味するところは、RIと財団の融和どころか、“TRFのRI”になった感があります。心集めのロータリーは、お金集めの組織に変貌して、一人でも施主の多からんことを祈り、1円でもお布施の多からんことを祈り、次から次にお金をつぎ込まなければ事業を継続できない火の車から降りられなくなってしまっているのです。

今日のRIの口癖は、会員増強、TRFへの寄付なのです。TRFへの寄付増進のための会員増強と言っても、誰も反論できない、悲しい状況にあります。

7. 2016年規定審議会 ～RC自治権の拡大～

ロータリーは、会員減少からくる第4の危機に直面して、会員身分、例会開催頻度、出席義務、入会金に関して、クラブ自治権の拡大を認めました。クラブ定款に例外規定を設け、上位規定を下位規定で否定することができるという異例の措置をとったのです。職業分類表に関しては、既に1968年、RIの直接監督権を放棄し、クラブの自治権に委ねられております。制度の中核にかかわる部分のRI直接監督権放棄は、巨大化して多様化したRIを律するスタンダード、最大公約数を、もはや見いだせなくなったための、RI生き残りをかけた、自己防衛策だったと思われます。これはRIの弱体化、衰退への序曲であります。逆にRCの自由裁量権が拡大したこととなります。

もしそうならば、1915年RIが地区制を引いてクラブを直轄管理する体制から、各クラブをRIBIのような中間管理組織と認め、間接的管理制度に変換したという、それこそまさにRI創設以来の大変革ということになります。RIは日本ロータリークラブ連合会の結成を許してくれるでしょうか？

2016年の規定審議会で、会員の全般的な資格条件は、従来の

「本クラブは、善良な成人であって、職業上および(または)地域社会において良い世評を受けている者によって構成されるものとする」から

「本クラブは善良さ、高潔さ、リーダーシップを身を以って示し、職業上および(または)地域社会で良い評判を受けており、地域社会および(または)世界において奉仕する意欲のある成人によって構成されるものとする」

と変更されました。これによって、

中核的価値観:

親睦、奉仕、高潔性、多様性、リーダーシップ

を信条とする会員で構成する必要が明確にされ、肩書より、人柄、外見より中身が問われているのです。肩書頼みの、安易な選民意識はお呼びではないのです。と言っても、これも、建前です。本音は、若者、女性会員を増強するための規制緩和策の一環であります。中核的価値観は単なる言葉の上での、免罪符ではないでしょうか。

また、2001年頃からRI理事会により幾度となく実施されてきた、各種の試験的プロジェクトの結果が大きく規定審議会で採択される傾向があります。しかしホーソン効果という心理学的用語があります。

ホーソン効果(プラセボ効果の一部)

信頼を受けている医師などの期待に応えるために、患者が症状を正確に伝えなかつたり、症状の改善があったかのような態度を、意識的や無意識的に行うこと。みられていること、期待されていることから来る心理的効果

必ずしも正しい結果を生むとは限らないのです。以って肝に銘ずべきであります。

2016年規定審議会は、多様化するロータリーに適応するために、RIの生き残りをかけて、人づくりロータリーと国際的人道的奉仕組織ロータリーの共存を許す形となりました。あたかもRIは2つの中心点を持つ楕円形を示すようです。ただし正楕円形ではなく、国際的人道的奉仕にシフトした、いびつな楕円形であります。生物学的に表現すれば、同種間雑種、レオポン状態にあるのです。一時的に生き延び、一応の存在理由を示し得ても、レオポンに繁殖能力はないのです。果して生き残りの道を開く結果になったのでしょうか。

8. ロータリーの夢と哲学

～21世紀のロータリー～

時代は移り、世相は変わりました。一部では

Post-Truthの時代

と囁かれています。この言葉は1992年頃英国で生まれた造語であります。「知に勝る情意」と言いますか、客観的事実の積み重ねだけでは判断されない時代を意味します。判断の根拠を与えるのは、人々の感情でしょうか。悪い意味での刹那主義、それをあおる、マスコミに主導されるポピュリズムの時代の為に、不確実、予測不能の時代であります。

こんな時代に、過去を分析して、未来のロータリーを予測できるでしょうか。

時代と共に、ロータリーも変わりました。奉仕の心を養う、人づくり組織からNPO法人、慈善事業団体に変質したのです。もはやそこには、奉仕哲学はありません。必要がないのです。歴代のRI会長テーマにも、この変質の過程をみる思いがします。

かつて、1960～61年度RI会長エド・マクロウリン氏は「You are Rotary. Live it. Express it. Expand it.」と語り、1974～75年度RI会長ウィリアム・ロビンスは「Renew the spirits of Rotary, by building men. Rotary's first job is to build men」と、人づくり組織ロータリーを謳いあげたのです。

しかるに、今年度、次年度のRI会長テーマは

「人類に奉仕するロータリー」(ジョン・ジャーム氏)、「ロータリー:変化をもたらす」(イアン・ライズリー氏)

であります。人づくりの為に自分にも奉仕するロータリーではありません。自己にも変化をもたらすロータリーではないのです。この2つのRI会長モットーは、私に謂わせれば、単なるRIの広報のための標語に過ぎません。ロータリー:に続く説明文にしか思えないのです。

こんな状況にあって人づくりロータリーへの回帰は、果たして可能でしょうか。RI理事会挙げて職業奉仕が忘れ去られた今、それが可能でしょうか。

もし可能とするならば、回帰のカギは、ロータリー誕生の地、アメリカにあるのでしょうか?

今では、ロータリーは産みの親アメリカの手には負えなくなっています。ロータリーの目的は、古くから大切にしてきた道徳、欲望の自己制御と他者への奉仕の精神を、日常生活、なかんずく、職業生活において実践しようという組織であります。古今東西、大切にされてきた、黄金律の実践なのです。したがってこれは西洋思想の属性というよりは、東洋思想の属性だからです。隣人愛の実践か? 利潤追求か? その転轍手としての役割を放棄したアメリカにとって、人づくりロータリーは手に負えなくなっています。人づくりロータリーへの回帰の鍵は、アメリカではなく、東洋、とりわけ日本にあると思うのです。1200年ごろから続いてきたアングロサクソン文明の時代は終わろうとしているのです。

西洋思想は論理的(logical)な世界であり、人間中心世界であり、自然は克服されるべきものであります。また、闘争的、破壊的、競争的です。一方、日本精神をはじめとする、東洋思想は、生態学的(ecological)、自然に跪く世界であります。そして、平穏、妥協的、協調的であります。そこに息づく精神は論理ではなく、情緒であります。

日本には世界に誇る“日本精神”があります。これがどんなにすばらしいかは、大正末期から、昭和

の初めにかけて、駐日フランス大使を務めた、詩人ポール・クローデルが、第2次世界大戦が帰趨を決した、昭和18年(1943年)にパリで語った「日本人は貧しい。しかし高貴だ。世界でどうしても、生き残ってほしい民族を挙げるとしたら、それは日本人だ」の一言で語り尽くされています。1922年講演のために日本に向かう船上でノーベル物理学賞受賞の報を聞いたアインシュタインは、滞在中、日本人の質朴さ、簡素さ、純粹さに感服し、後で広島、長崎への原爆投下の報を聞いて、「オーブエー(なんと痛ましい)」といったきり口をつぐんだと言います。

日本人の高貴さはどこから来るのでしょうか。お茶の水女子大学名誉教授の藤原正彦先生が『国家の品格』の著書で述べられている、“日本の国柄”を支える精神性のことを言っているのだと思います。その精神性は武士道であり、武士道は「武士の行動規範」ですが、ひとり武家社会にとどまらず、寺子屋教育を通じて、庶民の子弟、更には一般社会にも浸透し、読み、書き、そろばんと共に、日本人に浸透し、高い基礎的学力と共に、“日本の国柄”の礎をなしたのです。

“日本の国柄”は“情緒の心”と“形”であります。日本人の日常生活で大切にされてきている、“惻隠の情”、“卑怯を憎む心”の源泉であります。そこには論理では説明できない、問答無用の世界があり、これが家庭、学校における教育の基本をなすものなのです。損得勘定では物事を判断しない、西洋の金銭崇拜とはかけ離れた国柄が生まれたのです。

わが国において“日本の国柄”が醸成されていった、中世から20世紀に至る数世紀の間、西洋で誕生した思想はダブルG、すなわち、GODとGOLDを大切にす思想でした。いち早く産業革命をなしとげた彼らが大切にしたのは論理、数理、合理性の世界でありました。

しかし、論理には出発点、仮定が必要であります。その出発点を決めるのは、他ならぬ情緒であります。洗練されたより高次の情緒によって出発点を与えられない限り、以後の論理の展開は誤った結果を生むこととなります。勿論、論理は重要です。その論理により、鍛錬された情緒が付加されなければならないというわけです。

わが国はこれまで「大化の改新」によって中国文化の日本化に成功し、「明治維新」によって、西洋文化の日本化にも成功いたしました。アメリカ生まれのロータリーにも、日本化の努力が行われたのです。ロータリー史上、シエルドンのモットーを受けて誕生したといわれる「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」(1915年、サンフランシスコ大会)を下敷きにして、日本化が試みられたのが、大連ロータリークラブの古沢丈作氏(日清製油大連支店長)の「ロータリー宣言」(1928年)であります。この「ロータリー宣言」を、1936年神戸で開催された第70回地区大会で「ロータリーの綱領」の日本版として採用するよう提案が行われました。結果的には「ロータリー宣言」は「ロータリーの綱領」を補充するものとして採択された経緯があります。

しかし第2次世界大戦敗戦後、1991年ソ連崩壊後は特に、グローバリゼーション、アメリカナイゼーションの名のもとに日本の国柄を犠牲にして西洋化したことで、今日の日本に、失われた40年をもたらす結果となっております。戦後70年、西洋化、あるいは日米の調和の名のもとに出来上がったものは、浅薄な知的産物でしかありませんでした。

ロータリーが変質し始めた、2000年からは、東洋、なにかんづく我が国がリーダーシップを発揮すべき時代の到来と言われます。

“人類文化史が、20世紀の時期に刻印を押した、最も優れた職業人の倫理運動”ロータリーは、もともと東洋思想の属性であった、

と私には思えるのです。しかし、逆に、その対極にあるアメリカ、シカゴだったからこそ、世界はロータリーの誕生を求めたのかもしれませんが。

21世紀のロータリーが、職業奉仕を中心に踏まえた、人づくり組織として回帰し、隆々と栄えたあの20世紀初頭の、ロータリーを夢見るならば、日本のロータリアンの果たすべき役割は大きいと思います。その時のロータリーの哲学とはどんなものでしょうか。

21世紀の主役は、DNAと脳とコンピューターと言われます。この3つのキーワードを結ぶものは、情報であります。20世紀の科学はワトソン、クリックのDNAのらせん構造の発見(1953年発見、1962年ノーベル賞)を契機に、生命科学の時代と言われてきました。21世紀は心の時代と言われております。「DNAに魂が宿るか？」(F.クリック、1995年)と問いかけております。DNAの二本の紐は、ハードでしかありません。心はそれが生み出すプラス α の機能だと私は思います。

知性の指標として脳化指数(ハリー・ジェリソン、1973年)というのがあります。人類は他の生物に見られない高い脳化指数を持つといわれます。140億個にも上る大脳神経細胞が作り出す、途方もない数のニューロンが、DNAという物質レベルを超えたプラス α 、魂を作り出す、と私は思っているのです。何事によらず物質の量が、ある閾値を超えると、プラス α が生まれます。

20世紀、既に私たち先進国の人間がこの豊かさを経験した今、生み出されるプラス α 、21世紀の哲学は、「足るを知る者は、貧しと言えども富めり」(老子)ということではないでしょうか。そして、このことの重要性を、日本が、世界が、認識した時に、ロータリーの明日も、世界の明日も見えてくるのではないのでしょうか。

21世紀のロータリーは、夢か、終焉か？

ロータリーが歩みを共にしてきた資本主義は、専門家の見るところ21世紀には終焉すると言われてます。資本の自己増殖能力が失われたからであります。会員が減少するロータリーに終焉はないのでしょうか。数字のみを追いかけている間は、崩壊するのです。足るを知って、今の生き方を変えずして、今のようなロータリーに無関心な生き方を変えずして、夢を得る特効薬はないのです。

長時間の御清聴感謝申し上げます。このような機会を与えてくださって、久保泰造ガバナー補佐はじめ、西播第2グループの皆さんに厚くお礼申し上げます。

「補遺」 物心両面の豊かさを求める職業人の社交クラブ
～21世紀のロータリー～

私は、西播第2グループIMに於ける講演3日後、かねてより予定された手術のため、病床に伏すことになりました。幸いにして、主治医の神の手に救われて、一応の小康を得ることが出来たために、病床で2冊の本を読むことが出来ました。『量子力学で生命の謎を解く』(英国サリー大学のProf.カーリー、Prof.マクファデン共著)『量子論から解き明かす「心の世界」と「あの世」』(岸部卓郎京大名誉教授著)であります。その教えるところが、21世紀のロータリーを考える上で、何らかの示唆を与えうとの思いで、ここに「補遺」として書き加えるものであります。

私がRID2680のガバナーを務めた、2011～12年度RI会長は、インド出身のカルヤン・パネルジー氏でした。彼は、サンディエゴの国際協議会において、半ば瞑想するかのように「深く自己を顧みれば、そこには自分の耳では聞えないかすかな声があります。自分の目ではとらえられない、仄かな光があります。これらの声、光は自分の耳、目ではとらえられない、小さなものではあるけれど、心や魂を通して、初めてとらえられる、無限の力を持った、特別の力であり、人生の生き方をも変える大きな力があります。私達はそれをとらえて、抱きしめ、大切に世に広めましょう」と語られたのです。そこに見るものは、荘子の名言「見えない宇宙の姿を心で見、声なき宇宙の声を心で聞け」に通じるものであります。これは量子論的表現をすれば、見える世界(粒子としての量子)と見えざる世界(波動としての量子)の相補性ということが出来ます。

人間、宇宙を含めた、この世には「見える物質の世界のこの世」と「見えない心の世界のあの世」があります。「我思う、ゆえに我あり」で知られる、17世紀のフランスの哲学者、ルネ・デカルトの「物心二元論」は、その後の近代西洋科学の発展に決定的な方向付けを行いました。為に、西洋科学は「物質」の研究に終始し、「物質」を基盤に持たない、「心」は研究の対象外におかれてきたのです。然し本稿で述べた通り、20世紀に入って、DNAの二重らせん構造の発見を契機に、「命」や「心」をDNAという物質を基盤に説明しようとする時代が訪れています。しかしこれらはあくまで、物質を基盤に置く、マクロ的アプローチに過ぎません。

これまでのニュートン力学やアインシュタインの相対性理論のような、マクロの世界を対象とした古典的物理学に替わって、20世紀初頭から発展を続けている、量子力学は、古典的な物理学が通用しない、マクロ、ミクロの両方の世界を共に対象とした物理学として世の中に大変革をもたらそうとしています。いわば「物心一元論」的科学的であります。そして 10^{-15} メートルという、ミクロ的アプローチによって、「見える物質の世界、マクロの世界」においては、既に今日の情報社会(IT社会)の到来を可能にしました。人間の阿吽の呼吸までも読むロボットまでが登場しようとしているというのです。量子医学、生物学の分野においては、既に新しい知見が生まれております。

一方「見えない心の世界、ミクロの世界」においては、「心」までもが研究の俎上に上り始めています。

科学に物心二元論的科学的(古典的物理学)と一元論的科学的(量子力学)があるように、人類文明にも、物の豊かさを重視する、物質追求主義の西洋文明(物心二元論的文明)と、物の豊かさと、心の豊かさを共に重視する、精神文明を重視する東洋文明(物心一元論的文明)があります。

岸部氏は、これまでの人類文明の歴史を分析して「文明興亡の宇宙の法則」によって、西洋物質文明と東洋精神文明が、800年を周期に興亡を繰り返して来ていると考え、2000年以降は、西洋物質文明から東洋精神文明への文明交替による「心の文明ルネサンス」時代と位置付けられているのです。つまりは、1200年から2000年までのアングロサクソン文明から、2000年以降東洋、なにかんぞわが国を中心とした精神文明が始まるというのです。

このことは、あたかも、本講演で述べたように、ロータリーがNPO法人としての物財による奉仕から、人づくりロータリーとして、精神性重視のロータリーへ回帰しようとしていることと符合するかのように私には思えてくるのです。

ポール・ハリスは、かつて「ロータリーは宗教でも、宗教に変わる何ものでもなく、私たちが古くから大切にしてきた道徳を、日常の生活、なにかんぞく職業生活において実践しようとするものである」と語りました。ロータリーでいう道徳は「欲望の自己制御と他者への奉仕」であります。ロータリーは職業人として、利潤を追求するとともに、「足るを知るものは、貧しと雖も富めり」という、心の豊かさを求めているのです。

岸部氏は、人間の幸福度＝物／心＝所得／欲望と考え、「心」の時代、21世紀は、物の豊かさと、心の豊かさを共に大切にする時代であり、幸福を願うならば、老子の「足るを知りて、分に安んじる思想」(知足安分の思想)であり、禅でいう「吾唯足るを知る思想」(吾唯足知の思想)が大切であると結ばれております。この哲学こそは、ロータリーならずとも、物心両面の豊かさを願う人類の未来にとっては、永遠の哲学ではないでしょうか。

21世紀のロータリーは、一旦、歩みを共にしてきた資本主義と共に、終焉するかもしれません。そして物心両面の豊かさを願う職業人の社交クラブとして、回帰するのを待望するのみであります。もし世界のロータリアン全員がそれを心から待望するならば、願いは叶うのです。少しでも不協和音があるならば、それは実現しないのです。ミクロの世界からマクロの世界を洞察すれば、こんなことまで教えているように思えてくるのです。

(2017年5月12日、記)

後注:本稿は、西播第2グループIMでの講演をもとに、その後、若干の修正、追加を加えたものであります。また、本稿でいう国際ロータリーはRI、ロータリー財団はTRF、ロータリークラブはRCと略記し、単にロータリーと表記した時は、本来のRIのみならず、RC、さらにはロータリアンまでを包含します。文脈でご判断下さい。また、ロータリーの会員とは、厳密にはRCですが、ここでは、多くの場合ロータリアンを意味しております。